様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６４６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００１４１

研究課題名（和文）明治～昭和初期の洋楽受容の諸相―演奏の場・人・曲目・ジャンル・メディア

研究課題名（英文）Various aspects of Western music reception in Japan from the Meiji period to the early Showa period: Under the viewpoints of performance venues, musicians, repertories, genres and media

研究代表者
武石　みどり（Takeishi, Midori）

東京音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：７０１９２６３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：当該時期における船の楽団、音楽学校、映画館、軍楽隊、三越少年音楽隊、一般大学オーケストラの演奏記録をデータベース化し、演奏曲目の変遷や楽団による相違を検討した結果、以下のことが判明した。
宮内省楽部が式典や催事のために、東京音楽学校では教育目的で演奏曲目を選んでいたのに対して、軍楽隊や三越少年音楽隊では明治末より一般聴衆のための公開演奏を開始した。大正期より北米航路の船の楽団がジャズやサロン音楽を持ち込んだことにより、大正期後半に洋楽の普及が進んだ。軍楽隊と船の楽団の出身者の一部は映画館楽士となり、昭和初期にかけて演奏ジャンルの多様化、洋楽合奏の普及と交響楽団の創設に貢献することとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
宮内省楽部、軍楽隊、東京音楽学校、三越少年音楽隊における演奏曲目と演奏者については、これまで個別に論じられてきた。また、北米航路の船の楽団と東京の映画館における演奏曲目についてはこれまでほとんど論じられてこなかった。
本研究は同時代に並行して進行していた上記各組織の音楽活動について、演奏曲目と演奏者の情報をエビデンスとし、それを相互に比較して昭和初期に至るまでの大きな流れを捉えた点で学術的意義を有する。特に、演奏者の出自と経歴の調査により、軍楽隊、船の楽団、東洋音楽学校、三越少年音楽隊の出身者と交響楽運動との結びつきを明示できたことは大きな成果であった。

研究成果の概要（英文）：The researcher created the database of performance records of ship bands, music schools, movie theaters, military bands, Mitsukoshi Boys' Music Band, and general university orchestras during that period, and examined changes in the performance repertories and differences between orchestras.
While the Music Department of the Imperial Household performed music for ceremonies and special events, Tokyo Music School selected the pieces for educational purpose. On the other hand the military bands and the Mitsukoshi Boys' Music Band started at the end of Meiji period public performances for the general audience. In the latter half of the Taisho era, Western music became popular as the ship bands on the North American route brought jazz and music for salons and movies. Retired military and ship musicians partly became movie theater musicians and contributed to the diversification and popularization of Western music, and to the establishment of a symphony orchestra in Japan.

研究分野：音楽学

キーワード：西洋音楽受容　交響楽団　洋楽合奏　映画館

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

開国以来西洋音楽がどのように日本で受容されてきたかについては、洋楽受容史として多様な観点から研究がなされてきた。その中で演奏記録を扱った研究は、音楽学校における演奏記録（『東京藝術大学百年史』1998～2003 年；『音楽教育の礎』2007 年)、一般大学オーケストラの演奏記録（井上登喜子氏の一連の研究 2005 年～)、軍楽隊の演奏記録（谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム』 2010 年）等のように、特定の場所やジャンルに的を絞って行われてきた。他方、洋楽を演奏した人物についての研究はあまり進んでいない。ここで問題とするのは歌手やヴァイオリニストのようなソロの演奏家ではなく、合奏形態で洋楽を演奏した人々である。上記の先行研究における主たる関心は演奏曲目であり、指揮者の名前が挙げられることはあっても、楽団員についての詳細な研究はなされていない。そのような中で大森盛太郎『日本の洋楽』と内田晃一『日本のジャズ史　戦前・戦後』は貴重な情報源であり、当時の関係者への聞き取り調査に基づいて大正期から昭和期にかけての楽団と演奏者名を多数明記している点で注目に値する。しかし、著者がいずれもジャズの関係者であることも手伝って、これまでその成果がクラシックの洋楽受容史研究と有機的に結びつけられることはなかった。

以上のように、日本における洋楽の演奏史研究はジャンル別、機関別、時期別、メディア別に細分化されて研究が進められてきており、各研究で判明したことを相互に結び付け、大きな時代の流れを捉える試みは十分になされていない状況であった。

２．研究の目的

本研究では、いつ、誰が、どのような場でどのような楽曲を演奏し、それが「洋楽」として受容され、レパートリー化していったのか、また演奏者と演奏曲目にどのような変遷が見られるのかを、演奏の場やジャンルの違いを越えて総合的に捉えることを目指す。本研究の対象とするのは、独奏による演奏ではなく複数名で行う合奏形態の演奏であり、明治末期から昭和初期に至るまでに演奏された合奏について、クラシック、ポピュラー、ジャズ等の特定ジャンルに偏ることなく、幅広い観点で「洋楽」として捉え、演奏曲目と演奏者と演奏場所、メディアの諸側面から総合的に捉え直すことを目的とする。このように、昨今細分化の進んだ洋楽史研究にジャンル横断的な視点からアプローチすることにより、直輸入型の受容から独自の受容傾向が生じ、ジャンルの混淆から分化、さらには交響楽団の設立へと至った洋楽の変遷を、より詳細に活写することを目指す。

３．研究の方法

この目的を達成するためには、先行研究の成果に立脚することはもちろんのこと、再度一次資料に立ち返って演奏曲目と演奏者の記録を共通項目を揃えた比較可能なデータとして蓄積し、捉えなおすことが必要である。

(1) 演奏団体と場所（船、映画館、劇場、音楽学校、軍楽隊、三越少年音楽隊等）とメディア（生演奏、SP レコード録音、ラジオ放送、楽譜出版）ごとに演奏記録の情報を集約する。データの表記を統一し、比較可能な書式へと整理してデータベースを作成する。本研究においては特に映画館の週報収集に注力し、日本国内の一次資料に加えて、コロンビア大学のコレクションについても調査を行う。

(2) 上記データベースを用いて、演奏場所と演奏曲目の相互関係について考察する。膨大なデータを一律に並べて特定楽曲の演奏頻度を数量的に割り出すのではなく、それぞれの演奏場所の演奏傾向と年代的変化を確認するべく、考察の方法を吟味する。

(3) 各演奏団体に所属した人の動きに幅広く目を向け、音楽の学習歴および活動歴をデータ化する。

(4) 最終段階として、本研究においては、さまざまな演奏場所における演奏者（人）の流れと演奏曲目の変遷、実演と楽譜出版、レコード録音、ラジオ放送との関連を総合的に考察する。

４．研究成果

洋楽合奏はすでに明治期より軍楽隊、宮内省楽部、東京音楽学校学生により実践されていた。大正期にはそれに加えて東洋音楽学校、一般大学のオーケストラ、北太平洋航路の船の楽団や三越少年音楽隊、浅草オペラ、宝塚少女歌劇、さらには映画館における伴奏楽と休憩奏楽が始まり、一般市民が洋楽合奏を聴ける機会が増えた。本研究においてはその中で、特に船の楽士と映画館の楽士の活動に目を向けた結果、彼らが果たした役割について以下のような知見を得ることができた。

(1) 船の楽団で活動した人物 180 名の一覧を作成し、彼らの乗船前の学習歴と乗船後の活動歴を追い、大正～昭和初期の演奏者がどのような経歴をたどったのか、また船の楽士が当時の日本

の音楽界でどのような役割を果たしたのかについて考察した。初期ジャズ・軽音楽の研究者と情報交換をすることにより、船の楽士の一部がその後のオーケストラ運動に加わり、また別のグループが日本のジャズやダンスホールにおいてリーダーとなったことが判明した。その内容をまとめて論文とし、「1910～20 年代の船の楽士」と題して 2019 年に紀要に発表した。

(2)　活動写真館（無声映画館）で奏された音楽に注目し、映画館の週報に見られる演奏記録とこれまでの研究で得た船の楽団、音楽学校、軍楽隊、劇場、三越少年音楽隊、一般大学オーケストラ等の演奏曲目を照合し、その相互関係について考察した。その結果、特に 1920 年代前半までの演奏レパートリーは軍楽隊や浅草オペラの演奏曲目とつながりがあることがわかった。洋画館で西洋の楽曲演奏が続けられたことにより、聴取しやすい定番曲が「洋楽」の代名詞として流布したことは、当時のセノオ楽譜やシンフォニー楽譜の出版状況、ひいてはラジオ放送や SP レコードにおける選曲状況にもつながっている。これは、東京音楽学校や一般大学オーケストラで交響曲の演奏を目指したのとは異なる動きとして捉えられる。これに対して、邦画館では邦画に適した伴奏楽曲の編曲・作曲が試みられ、次第に邦楽器と洋楽器でよく知られた旋律を組み合わせて演奏する和洋大合奏が増加した。さらに 1927 年以降 1929 年（トーキーの導入）に至るまでの間は、レビューやジャズ、舞踊などの実演を映画と組み合わせることが多くなり、映画館の役割は「洋楽の紹介」から「さまざまなエンターテインメントの殿堂」へと多様化した。

(3)　東京の主要な映画館の楽士 275 名の出身とその後の経歴をたどり、彼らの出自には軍楽隊出身者と、東洋音楽学校や船の楽団に所属した経歴を持つ者、の大きく二つの流れがあることが判明した。前者は松竹や日活の系列館で活動し、後者は何人かのリーダーを中心にグループを形成して幾つかの映画館で場所を変えながら活動した。また後者の一部は 1925 年の日露交歓交響管弦楽演奏会をきっかけに交響楽運動に参加し、1926 年以降は新交響楽団員、あるいは日本交響楽協会員となりながらも、なお映画館での活動を続行した。以上(2)と(3)について 2019 年 10 月の日本音楽学会第 70 回全国大会において口頭発表した。

(4)　1916～29 年の東京の主たる映画館 14 館における演奏者と演奏曲目の特徴と変化を見ると、考察対象年を 3 期（1920 年まで、1921～25 年、1926～29 年）に分けて捉えることが可能である。第 1 期では洋楽合奏の記録がまだ少なく、楽団編成も 5～15 名程度であった。第 2 期には楽団編成が 20 名から最大 40 名程度にまで拡大され、洋楽合奏が行われる映画館が増加した。このきっかけとなったのが、1920 年の松竹キネマの設立であったと考えられる。この時期は、軍楽隊の野外演奏や宮内省楽部においても吹奏楽から管弦楽の演奏へと移行した時期にあたる。第 3 期は交響楽団が設立された時期で、交響楽団員の多くは特定の映画館での演奏も副業として兼業していた。交響楽団の創設には映画館楽士も多く参画していたことが確認でき、その要因としてこれまで 1925 年の日露交歓交響管弦楽演奏会における演奏体験が挙げられてきたが、加えて、1920 年頃から国内の在留ロシア人楽士との合奏体験が交響楽団参画への刺激となった可能性についての示唆を得た。以上の内容を、2020 年 11 月に日本音楽学会第 71 回全国大会において口頭発表し、さらに 2022 年に論文「大正～昭和初年代の映画館の音楽と楽士」として紀要で発表した。

(5)　本研究により確認できた①大正期に各種楽団で活動した人物の履歴、および②演奏曲目のデータは、今後の研究の基礎資料となろう。

(6)　さらに今後の研究課題として、日本で交響楽団が創設される前段階に出現した各種合奏団体についての資料調査を進め、その相互関係について検討する必要性が浮上した。来日したロシア歌劇団（1919 年、1921 年）、舞踊団（1922 年）、および在留ロシア人楽士――そこには、どのような奏者が所属し、どのようなレパートリーを演奏したのであろうか。また、山田耕筰の交響楽運動（東京フィルハーモニー会管弦楽部、日本交響楽協会）に参画した個人演奏家や宮内省楽部の奏者、1921 年設立の東京シムホニー・オーケストラ（ドブラウチッチ指揮）や 1923 年設立の東京シムフォニー管弦団（ゲルスコヴィッチ指揮）の楽員にはどのような相互関係があり、それが 1925 年の日露交歓交響管弦楽演奏会、さらに 1925 年以降の日本交響楽協会（新交響楽団）とどのように結びついていくのだろうか。この点についての資料収集と考察を次なる課題とし、日本における交響楽団出現の経緯について、エビデンスを基に新たな知見を導き出したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 武石　みどり	４．巻 42
２．論文標題 1910～20年代の船の楽士―国内の洋楽受容・分化との関連	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京音楽大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 武石　みどり	４．巻 45
２．論文標題 大正～昭和初年代の映画館の音楽と楽士―管弦楽普及の過程―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京音楽大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 武石みどり
２．発表標題 大正～昭和初期の映画館の音楽　ー洋楽受容史の観点から―
３．学会等名 日本音楽学会第71回全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 武石みどり
２．発表標題 映画館における洋楽合奏　大正～昭和初期の楽士とレパートリー
３．学会等名 日本音楽学会第70回全国大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関